

Watching 第一期 赤松政経塾

世界が日本の女性の活躍状況を注目する中、果たして日本の女性人財は十分育ってきているだろうか？
女性リーダー育成に取り組む「赤松政経塾」の活動を取材した。

▼超党派の国会議員・経済人・文化人等が講義

	第一講義	第二講義
第1回 9/15	テーマ： 「やる気があれば変えられる」 講師：小宮山洋子さん 小宮山洋子政策研究会代表	テーマ： 「女性はもっと活躍できる」 ～女性の力で企業を活性化する～ 講師：岩田喜美枝さん 実業家・元官僚
第2回 11/9	テーマ： 「輝け!! 女性」 ～女性を支える政治の役割 講師：高木美智代さん 公明党 衆議院議員	テーマ： 「伝える極意」 講師：長井鞠子さん 同時翻訳家・会議通訳者
第3回	1/18 WIN WIN の開催する新年会	
第4回 2/8	テーマ： 「オール沖縄」 沖縄が切り拓く新しい道 講師：糸数慶子さん 無所属 参議院議員	テーマ： 「歴史の転換点を迎えて これからの日本と世界」 講師：岸井成格さん ジャーナリスト・政治評論家
第5回 3/8	テーマ： 「女性が変わる、日本の社会」 講師：林久美子さん 民主党 参議院議員	テーマ： 「資産はこうして増やせ」 ～心豊かな生活経済の知恵と活用法 講師：中井恵美子さん ファイナンシャルプランナー

2020年にあらゆる場面のリーダーの30%以上を女性にするという政府方針が進められているが、政策決定の場に関わる女性政治家や、経済界など各業界で活躍する「女性リーダー」とその予備軍は、まだまだ少ないという現状がある。元文部大臣で男女雇用機会均等法成立に力を尽くした赤松良子さんは、そのリーダーとなる女性たちの育成が急務と考え「赤松政経塾」を2014年9月15日からスタートさせた。

この塾では、超党派の女性政治家や各界で活躍する女性を講師に招き、講義を行うと共に、交流セッションの機会を提供している。今号ではその中から近隣諸国との関係を考える講義を行った岸井成格氏の講義を掲載した。この赤松政経塾のスタートを起点とし新たな世代間の壁を超えた女性たちの「応援ネットワーク」が生まれていることに注目していきたい。

2015 新年会

1月18日主婦会館プラザエフにおいて、WIN WINとクォータ制を推進する会、赤松政経塾のメンバー交流を図るために新年会が開催された。女性のネットワーク連携がさらに大きな女性たちの輪となって、大きなうねりを作り出せる新年のスタートとなった。

◀WIN WIN 代表兼塾長の赤松良子さん



▲小宮山洋子政策研究会代表
小宮山洋子さん



▲上智大学法学部教授 三浦まりさん



▲衆議院議員 高木美智代さん



▲司会を担当した落合良さん
(WIN WIN 運営委員)

◆第二講義

二つの屈辱を 理解しなければ 国際問題は解決できない

有史以来、他国から侵略されたことがほとんどない日本。侵略された側の国の心情がわからなければ領土問題も外交問題も解決できないと岸井成格氏。二つの屈辱とは何なのか。戦後70年という節目に日本人が向き合わなければならないこととは――。

岸井成格さん



【プロフィール】慶応大学法学部卒。毎日新聞記者、政治部長、編集局次長、主筆などを経て現在、特別編集委員。TBS系テレビの「サンデーモーニング」「ニュース23」などにレギュラー出演し、政治・時事問題等の明快な解説で知られる。21世紀臨調運営委員、日本ニュース時事能力検定協会理事長、イオン環境財団評議委員、司馬遼太郎記念財団理事など。著書：『政治家とカネ』『昭和の妖怪』『永田町の通信簿』『大展開―瓦解へのシナリオ』『政治言論』ほか多数。

戦争の芽は 小さいうちから摘み取る

今朝、TBSの番組の「サンデーモーニング」収録を終えてこちらにきました。

先般のイスラム国による日本人質事件が話題になりました。あの事件で我々は、人間はどこまで残虐になれるかを見せつけられました。歴史をひもとけば過去にも似たようなことが繰り返されてきています。なぜこのようなことが起こるのか。番組の最後で私はこう申し上げました。「歴史や時代状況によっても異なるが、憎しみの連鎖が引き起こすのは、戦争、内戦、独裁体制だ。独裁体制の社会になると、厳しい監視体制が敷かれ、少しでも考え方が違うと抹殺する、それがまかり通ってしまう。一度そのような道に踏み込んだら誰にも止められない。そんな世の中になりそうだと少しでも思ったら、小さいうちに芽を摘み取る必要がある。国民一人ひとりが自覚して注視していく必要がある」と。

戦後70年、 総理談話の内容は

今年戦後70年の節目となる

年です。注目されるのが、8月15日の戦後70周年記念式典で発表される「安倍内閣総理談話」の内容です。

戦後50周年の村山富市内閣総理大臣談話のキーワードは「植民地」「侵略」「心からのおわび」でした。近隣諸国との和解決に向けて一歩前進したと話題になりました。戦後60周年の小泉純一郎内閣総理大臣談話では再びアジア諸国に対する謝罪を表明。しかし貫して「自虐的歴史観」に反発し、戦後レジームからの脱却を標榜してきた安倍総理が、どのような談話を発表するのかが今注目されています。国内でも意見が分かれるでしょう。戦後70周年の首相談話は、アジア諸国との関係性にも大きく影響するだけに、私も大変興味深く見守っているところです。

日本は被侵略国 の気持ちからわからない？

現在の日本は、領土問題をめぐって、日本と中国、韓国、ロシアなどの近隣諸国との関係が緊張しています。今に始まったことではなく、長年の間、これらの国

た。それは何なのでしょか。キーワードは「二重の屈辱」です。

日本は鎌倉時代の元寇を除き有史以来2000年にわたって他国から「侵略」されたことがない稀有な国です。そのためか、侵略された側の国の感情に対して鈍感なところがある。このギャップを日本人は認識しておく必要があります。

尖閣諸島問題にしても、竹島、北方領土にしても、日本が言っていることは正しい。歴史的にも国際法的にもこれらが日本の領土であることは間違いありません。しかしそれを言えば言うほど、相手の屈辱感を刺激する。そのことについても日本は敏感になるべきなのです。

120年前から100年前までの20年間に、日本は、日清戦争（1894年）、日露戦争（1904年）に勝利し、沖縄統治、朝鮮統治、台湾の植民地化を一気に進めました。極東の小国が、清やロシアといった大国に勝利したのです。戦争で勝った国が領土を取ることは慣例であり国際法的にも間違っていない。し

かし、負けたほうにとっては大変な屈辱です。なぜあんな小さな

国に我々の王国が、帝国が負けたのか。彼らにとっては思い出したくもない嫌な歴史なのです。

それが第1の屈辱です。

では第2の屈辱とは何か。

それが戦後70周年に関わってきます。

領土問題を巡る

各国の思惑

第二次世界大戦で日本は敗戦国となりました。では戦勝国はどこでしょうか。実は、中国も韓国もロシアも戦勝国にはなれていない。終戦後の決着とは何か。それは、「領土問題と請求権」について同意をとりつけ「平和条約」を結ぶことです。しかしこの3国ともまだ日本と平和条約を結ぶことができていない。つまり戦勝国になれていない。これが第2の屈辱なのです。

日本とロシアとでは

終戦日が異なっている

日本にとつては、8月15日が終戦日です。しかしロシアにとつては、日本が降伏文書に調印した9月2日が終戦日であり、翌日の9月3日が対日戦勝記念日

です。

今年の9月3日に、中国とロシアが共催で、対日戦争勝利記念日の祝賀を行い、韓国の朴槿恵大統領も招待しようとしている。彼らはそれをやらないと気がすまない。なぜか。

日本は1945年8月15日にポツダム宣言を受諾しました。ポツダム宣言では、第二次世界大戦の処理方針として領土不拡大の原則が記されており、このことから日本が北方領土の放棄を求められる筋合いはない。しかし、第二次世界大戦終戦の直前8月



著作者:Kzaral

8日、ソ連(当時)は一方的に日本に宣戦布告し、満州国、樺太南部、朝鮮半島、千島列島を制

圧。以来ロシアは、北方領土はロシアのものだと主張しています。日本からしたら、終戦後のどさくさに紛れて不法占拠されたわけですが、ロシアにとつて終戦日は8月15日ではなく、9月2日。戦勝国が領土をとつて何が悪いという言い分です。

このようなわけで、戦後70年になりますが、日本とロシアは未だ平和条約を締結できていない。これは国際的にも異常な状態です。

日中国交正常化時に

棚上げされた尖閣諸島問題

日中関係を見てみましょう。

第二次世界大戦後、懸案事項となっていた日中国交正常化は、1972年、田中角栄内閣の時代に大きく進展しました。当時の中国の首相、周恩来は「日本の人民と中国人民はともに日本の軍国主義の被害者である」、第二次世界大戦の戦争責任は、「日本軍国主義」にあるのであって、「日本人民」にはないとし、日中共同声明に署名し、ここに

日中国交正常化が設立。その後、福田赳夫内閣のもとで日

中平和友好条約が締結されました。しかし、最後の最後まで尖閣諸島問題が残りました。

当時の中国の最高実力者である鄧小平が条約批准のために来日し、プレスセンターで記者会見が行われました。尖閣諸島問題について彼が何と言ったか注目していきましょう。緊張が高まる中、彼が語った言葉は忘れることができません。「我々の世代ではいい知恵が出なかった。この条約締結によっておそらく日中関係は改善が進むだろう。そうすればいい知恵が出るだろう。50年、100年かかるかわからないが、子どもたちの世代にまかせましょう」と。そのときに居合わせた外務次官があくつと感心して言いました。「さすが大物政治家です。(尖閣諸島問題は)棚上げと言ってくれましたね」と。

朴槿恵大統領は

日本に甘い顔ができない

韓国、北朝鮮とはどうでしょう。8月15日は、韓国、北朝鮮にとって抗日戦争に勝利した

日であり植民地解放の日です。しかし戦後補償をめぐって、日本は「韓国を合法的に領有、統治しており、韓国と交戦状態にはなかったため、韓国に対して戦争賠償金を支払う立場にない」と主張。つまり、第二次大戦中は、韓国は日本の植民地であり、韓国人は日本国民だった、日本人が日本人に賠償金を請求するのはおかしいでしょう、払いませんよというわけです。これは韓国人にとって屈辱以外の何物でもない。

その後、十数年にわたって日韓外交正常化交渉が続けられ、1965年ようやく日韓基本条約が締結。日本は韓国に対して莫大な経済援助を行い、韓国は対日請求権を放棄することに合意しました。しかしこれは、これから日韓の新しい関係を築きましようという条約にすぎず、平和条約ではない。

このときの国家再建最高会議議長が朴正熙で、朴槿恵の父親にあたります。彼は親日家だったため韓国内では「日本と屈辱的な条約を結んだ」と非難された。だから朴槿恵は日本に対し

て甘い顔をするわけにはいかないのです。

他国と歴史認識を 理解し合うのは難しい

新聞記者時代に、日韓問題の取材に行くたびに先輩から繰り返し言われた智恵があります。「韓国人と決して歴史の話はするな」と。殴り合いのけんかになるからと。

歴史認識問題はそのくらい難しい。伊藤博文は日本では初代総理大臣でありお札にもなった人ですが、韓国では伊藤博文を暗殺した安重根は英雄です。

領土問題については、日本が正しい。しかし、それを言えば言うほど相手を怒らせる、必ず相手を侮辱することになるということを認識しておくべきです。

戦争の歴史について もっと学ぶべき

本来なら、こういうことは学校で教えるべきことです。なぜ日本では教えないのかと思います。

沖繩の問題もそうです。安倍総理は、2013年の4月28日、61年前の同日にサンフランシスコ講和条約が発効し日本が主権を回復した日を「主権回復の日」と定め、記念式典を開催しました。しかしこの日は、主権回復の枠外に置かれた沖繩県民にとっては「沖繩が切り捨てられた日」なのです（沖繩が返還されたのはその20年後の1972年です）。それを忘れてお祝いの日にしてしまう。

戦後70周年を迎えるにあたって、天皇陛下が「満州事変から始まった先の大戦」という言葉を使われた。単に「先の大戦」と言えばいいところを「満州事変から」とおっしゃったことの真意は何か。満州国とは、侵略と植民地の象徴です。そこにわざわざ言及されたのは、「日本人は忘れすぎている」という警鐘だったのではないかと思えてなりません。

戦後70周年にあたる今年、さまざまな面で歴史と向き合わなければならぬ問題が出てくるでしょう。ほかにも、TPP、JA改革、辺野古への基地移

転、集団的自衛権を巡る安保法制、領土問題など、重要な課題が山積しています。安倍内閣はこれをどう乗り切っていくのか。当面目が離せませんね。
(2015年2月8日収録)

◀50名を超える受講生たち。メモを取りながら熱心に聴き入っていました



赤松政経塾 参加者の声



全ての人に優しく
多様性を
認め合える社会に

建設会社勤務、一級建築士

梅田知奈さん

建設会社で一級建築士として仕事をしています。建設業はまだまだ男性が圧倒的多数を占めており、社会全体を見渡しても決定権のある立場にいる女性は少なく、マイノリティの声が届きづらいのが現状です。まさに日本の政治そのものです。「私を変えなければ誰が変えるんだ！」そう強く思い、政治家を本気で志すようになりました。赤松政経塾でしっかり勉強し、すべての人に優しい社会を作っていける政治家を目指します。

待つだけでなく
自ら日本の政治と
教育を変える!

金融関係勤務

板津由華さん



「女が男に口答えをしてもロクなことがない」。海外の教育機関への留学中に受けた一言が、政治家を志すきっかけに。早期からのジェンダー教育必修が必要で。教育・法律を変えなければ日本の社会は良くなるない。もっと女性が立法の場に増えなければと思います。「誰かが変えてくれるのを待つのではなく、私が国を変えにいく」。強い思いから、赤松政経塾に参加しました。多様な生き方が認められる社会を目指し、次世代に道を拓く力強い政治を目指します。



この国に生まれて
よかったと思える
社会を作りたい

子育て支援アドバイザー

花堂晴美さん

18年間の子育て支援業務の中で虐待・貧困・DV・教育問題・家庭崩壊等さまざまな社会問題を直視してきました。誰もがこの国に生まれて来てよかったと思う人生であってほしい。そのために今、私ができることはとって考え「政治」を志しました。思いだけではなく中身のある政治家として活動できるようにと赤松政経塾に入塾しました。実際に活躍されている先生方、共に学んでいる塾生の皆様との出逢いは一生の財産となると実感しています。

多様な生き方から学び
学んだことを
広く伝えたい

人材開発会社勤務 キャリアカウンセラー

大塚三佳さん



女性支援のワンストップサービスを目指しています。多様な生き方のロールモデルと知的好奇心を求め、入塾しました。講師の皆様からは、自分を安売りせず困難な事に挑戦してきた健気さと、希望の見えない時代に、自らが希望となり輝いてきた強さを学ばせていただいております。未だ経験不足な私は、走りながら強くなるしかありません。先輩方から豊かに生き抜く知恵を学び、自らがメッセージヤーとなって多くの方へ生きるヒントを伝えてまいります。